
名前のない物語

とんかつ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

名前のない物語

【Nコード】

N6263Y

【作者名】

とんかつ

【あらすじ】

どこにでもある普通の少年による復讐の物語。

処女作です。小説が大好きで、自分も書いてみたいと思ったので書きました。自分が好きなものをいろいろぶち込んでいます。

小説家になろうの機能もいまいちわかっていないし、若干機械音痴なので、読みにくいところや変なところが出てくると思いますのが、よろしければその都度ご指摘ください。アドバイスなども大歓迎です。

それではよろしく願います。

俺には何もない。

頭が良いわけでも、運動が出来るわけでも、魔法が上手いわけでも、顔が良いわけでもないし、夢なんてものも持っていない。

ともすれば、生きる理由すら、ないのだろう。ただ、死ぬ理由がないから、毎日を漫然と生きているだけだ。

きっと、このまま、なにもないまま生きて、何もなくて死んで行くのだろう。

物語にでてくる村人のように。

こんなはずじゃなかったのにな。なんてつぶやきながら。

俺には出来た妹がいる。この女性優位な世界に似つかわしいほど多量の魔力を内に秘めた妹が。死んだ両親と同じ病気に罹った人を救いたいなんて言う、優しい妹が。「兄さん大好き」なんて言っ自分をも慕ってくれる可愛い妹が。

彼女は違う。何もない俺なんかとは違う。そこらにいる有象無象の輩とも違う。正しく、物語の主人公になれる器を持っている。世界に二人だけしかない、俺の大事な家族。

俺は主人公にはなれない。何も持っていない人間を主人公にしてくれるほど、世界は優しくない、黒楼や紅蓮のような、才が溢れる人間にのみ、世界は微笑むのだ。

それでも構わない。なりたいたと、子供心に感じた主人公になんてなれなくても。俺は妹のためになら、生きることが出来る。

妹の助力になることを生きる理由にしてもいいのなら。

俺の望むすべてを持っている愛すべき妹のために、この薄っぺらな人生を捧げることで、俺の命が、価値あるものになるのなら。

そんな俺のモノローグ

「兄さーん。ご飯出来たよー」

妹の呼ぶ声が聞こえて、俺は顔をあげた。

ふう、と一息を零して、肩に掛けてある布で汗を拭う。

いつの間にか日も暮れている。夢中になりすぎたかなんて小さな笑みを浮かべて

「ああ。今行く」

と声をあげた。後ろに積み上がっている薪は後で片付けるかなんて考えながら、俺は家に入った。

妹は、食卓についた俺に駆け寄ってきて

「お疲れ様」

と言いながら、両手に大事そうに抱えている水を差し出してくる。

「ありがとう」

と言って受け取り、ゴクゴクと水を嚥下する。

それを妹は嬉しそうに笑いながら見る。

両親が病気で死んで1年、一度も変わることはない日常の一コマだ。

「兄さん、明日は狩りに行くんだよね？」

妹が不安そうに尋ねる。

「ああ、そろそろ食糧が少なくなってきたからな。森に入って、ホーンラビット辺りを狩って来なきゃいけない。」

現在、この村には2人の人間が住んでいる。俺と、妹だ。村の北、東、南は森に囲まれ、西には、悪魔が棲むと云われる山が聳えている。人里まで徒歩で3日ほどかかるため、人の往来は無いに等しい。5年ほど前までは、父の知り合いの行商人が年に一度訪ねて来てい

たらしいが、森で事故に合い亡くなったらしく、それ以降、人一人として、この村に来ていないらしい。

当時4歳だった俺と妹も、その父の知り合いとは何度か会ったことがあると、父は言っていたが、当然のように覚えていない。

いや、そんなことよりも5年も前から、狂おしいほど可愛い妹を、その人はほとんど拝めていないことになる。人生損してるぜ。

「兄さん？」

……とにかく、この村は完全に自給自足だ。

何をするにも自分たちの力で成し遂げなければならず、今回のように食糧不足に陥るような時は、近くにある川で魚を釣るか、狩りに出かけるのである。

不安そうにこっちを見てくる、ため息が零れるほどに可愛い妹に笑いかけながら

「大丈夫だよ。この辺りの森に、人が仕留められないような魔物は出てこないはずだ。」

全く、心配性だなと笑う。

「それでも、まだ9歳だし、危ないよ、兄さんに何かあったら、私……わっ！」

泣きそうな顔も世界一可愛い妹を抱きしめる。

驚いた顔もとんでもないキュートだ爆発しそうだ。

「大丈夫だって。この1年で何度かしてきたことだし、あぶなくなったら逃げるし、それに、おれがお前を残して死ぬはずないだろ？」
そう妹の目を見ながら答える。

この会話も、何度交わしたか分からない。狩りに行くたびに、美の神の化身である妹は心配そうな顔をして訪ねてくる。だから、俺も何度も同じ言葉で返す。

そうさ。俺は死なない。さみしがり屋な妹を残して、俺は死ねない。

数日前、ウィズドム魔法学校からベルバード便が届いた。

内容は、俺たち兄弟二人を待生として迎えたいというものだった。

そういえば、両親が生きていたころ何度か街に連れられて行った事がある。街について宿に荷物を置くと、父は決まって髭の生えた白髪の爺さんと話しこむ。その間、よく二人で図書館の本を読んで待っていた。俺は勇者の冒険譚を、妹は魔法書や医学書などなにやら難しい本を読んでいた。一度読んだ本の内容は忘れないらしい。とんでもなく賢い奴だ。俺も読んではみたが何が書いてあるかさっぱり理解できなかった。父はあの爺さんの事を先生と呼んでいたから、きっとあの爺さんが魔法学校のお偉いさんだったのだろう。あの時は医者とはかり思っていたが。

一年前に、両親は死んだ。両親の病気は過去に例をみないものだった。体から魔素が徐々に抜けていき、決して戻ることはなかった。あらゆる薬を試したが効果は無かった。魔素が消えた生物に待ち受けるものは死だ。動物、植物、人間、魔族、等しく死が訪れ、塵となって消えていく。

通常、魔素がなくなるなんてことはあり得ない。魔法を連続して使い続けるか、ドレインと呼ばれる禁魔法で吸い取られるかだ。しかし、前者は、魔力を限界まで消費し続けたとしても、脳が自動的に魔素の放出を辞めてしまう。意識が落ちてしまうのである。ドレインについては禁魔法として指定されて200年、今では使い手すらない状態だ。この200年の間、生き物には形ある死が与えられていた。

俺と妹は、両親が塵となって消えていく瞬間を見届けた。もがき苦しみ、足から徐々に塵となっていくその一瞬一瞬を、網膜に焼き付けた。手をつないで、決して目を逸らさずに。2人で、あの村で、4人の家で。

あれから、妹はただでさえ熱心だった勉学に更に励んだ。同時に魔法も並行して練習した。両親のように悲惨な最期を遂げてほしくないと、泣きながら。

その姿を見て、綺麗だと思った。尊いと感じた。

優しい妹のために、何かしたいと、本気で考えた。

両親が死んで、妹のために生きると決めて、すっかり忘れていたが、10歳になれば魔法学校の入学許可がおりる。

2人が死んだ時も音沙汰なかった癖に、今更になって連絡してきやがって。まあ当然か。俺は凡才だが、妹はそれこそ100年に一人の逸材だ。魔法学校としても逃す手はないだろう。

とにかくこれは渡りに船だ。

2人とも特待生なら入学金や学費もほとんどかからないし、これ以上妹がこの村で学べることも少ない。

街へ出よう。

手紙によると、入学は、降雪期を過ぎてから予定されている。となると、後半年は時間に猶予がある。

今のうちに、武器、防具、食糧、衣類、雑貨などを必要なものをそろえよう。幸い村の周りは資源が豊富だ。

魔法学院宛てに、妹が了承の手紙を綴る。俺は字が得意ではないからな。恥ずかしいことだが。

書いた手紙をベルバードの足にくくり付ける。妹に万一があつてはいけないので俺の仕事だ。過保護ではない。当然のことである。ベルバードはクエツと一啼きして飛び立っていった。一日もしないうちに学院に届くだろう。

俺は凡人だ。夢見がちでもある。毎日のように勇者の冒険譚を読んでいるし、多少は特訓もしている。とはいっても、半刻程度走ったり、軽く筋トレしたりする程度だが。俺が今気にいっているのは、科学というものが発展した世界の少年が、こちらのような世界に来て、不思議な力で次々と悪を倒し、最後には魔王に攫われた姫様を救い出すというものだ。人は偉大だ。化学なんて言う迷信から、これだけの物語を創作できるのだから。

ただ、例え俺がそんな立場になっても、彼らのようにはなれないだろう。例え神様に会って特別な能力をもらっても、例え今の知識もまま赤ん坊になっても、きっと、俺は今のままだ。大した努力もしない。変わろうとは思っているのに実行しようとしれない。変わることもができるのに、ありもしない未来だけを見ている。

妹が、いなければ。

両親が死んで、妹の力になりたいと思うようになってから、俺は今までしなかった努力をした。野草などについての知識を身につけ、料理も多少できるようになった。なにかあった時のために、木の棒を持って素振りもしている。とにかく、多くの面で妹の役に立ちたいのだ。

妹はその間、ひたすら勉強をしている。既存の魔法陣を組み合わせたり、新しい魔法を創造したりと、発表したらまず間違いなく、魔法賞を授与できるだろうものばかりだ。九才にして、魔法省に入るなんてこともあるかもしれない。いや、間違いなくある。

だけど……だけどまだ、両親が死んだ病気の治療法は、その糸口さえ見つかっていない。

朝起きたら、雨が降っていた。ざあざあと、大きな音を立てて。まるで光が降っているようだ。もしかしたら、雨期に入ったのかもしれない。

今日は狩りを予定してたんだが……仕方がない。可愛い寝坊助さんを起こして軽い朝食をたべてから、一緒に魔法についての研究をしよう。研究なんてつまらないけど、妹と一緒にならきっと楽しいだろう。そんなことを考えながら、俺は一人で笑っていた。

俺は死にかけている。

妹のために水を持って行こうと思って、水を汲みに出て、屋根伝いに井戸まで行こうとして、そして、切られた。

知らない奴だった。当然だ。こんなところに、普通、人はこない。

そいつは、黒い鎧を着て、後ろに2人の鎧姿の人間を引き連れている。

そして、黒鎧が、家に向けて、その指を、差した。

やばい、やばい、こいつらはやばい！

倒れられない。今倒れたら、妹が、妹まで、殺される！

齒を食いしばれ。家の入口まで駆けろ。そうだ。奴らを通すな。

奴らより早く入口まで辿りついた俺は、立て掛けてあった木刀を握りしめ、奴らと対峙した。ここを一步も通さない決死の覚悟だった。2人、殺した。振られた剣をさけ、木刀で首をへし折ってやった。無我夢中だ。まるで絵本を読んでいるみたいに、音が、映像が、途切れるように進んでいく。

息が続かない。血が出すぎたのか、頭がくらくらし、目が霞む。

「……うとを、守るんだ。」

唇を噛み、言葉にする。

約束したんだ。妹を守るって、両親に。誓ったんだ。妹を守るって、自分に。

腕が重い。足が震える。だがしっかりと構えて、奴を睨みつける。

「……見事だ。」

邂逅してから、互いに発した言葉は、たったの一言だけだった。

黒鎧が剣を突きだす。だめだ。避けられない。

全ての動作がやけに遅く感じた。

ゆっくりと構えられた剣が、信じられない速さで突き出され、飛び出してきた妹の腹に刺さり、俺もろともを串刺しにした。

「……っ！」

言葉にならない。なぜ妹が！

ズブリと音を立てて剣が抜かれる。同時に支えを失った俺たちは、重なり合うように地面に倒れこんだ。

「ごめんね……兄さん……守れなかった。」

こっちのセリフだ。俺は、守れなかった。謝りたくて口を開いたが、

ヒューヒューと空気が漏れるだけだった。

俺と妹は、ここで死ぬ。

だから、妹の目をじっと見つめた。言葉にできない全ての想いを乗せて。

頬を打つ雨は、気にならなかった。

「兄さん……泣か……ないで。死なな……いで。生きて。」

妹が涙を流しながら言う。苦しそうに、手を出してきた。俺は最後の力を振り絞って、その手を握った。ふわりと、嬉しそうに微笑んだ妹を見て、意識は闇に包まれた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6263y/>

名前のない物語

2011年11月19日05時17分発行